

大学生のひきこもり心性と自己・他者意識および欲求不満耐性との関連

The relationships between “Hikikomori”, Self/Others consciousness and frustration tolerance in college students

土屋 美樹 (Miki Tsuchiya)

指導：山崎 久美子

【問題と目的】近年、純粋なひきこもりではないが、実質はひきこもりに近い大学生が存在する(松本, 2003; 樋口, 2006)。これまでも、大学生のひきこもり傾向に焦点をあてた研究が行われてきたが(坂東, 2002; 矢嶋, 2002; 松本, 2003), 尺度開発においては、さらに検討を行うことが重要である。ひきこもり状態の人の中には、不登校経験のある人が多く存在しており(伊藤, 2002), 不登校に関する研究においては、不登校生徒の自己・他者意識が一般的に高く(本間, 2000), 不登校児では、自我防衛力が乏しく、欲求不満耐性の低下がみられる(徳明, 2001)。青年期は、自己意識の形成・発達にとって重要な意味を持ち、児童期においてほとんど経験しない外界からの強い圧力に有効に対処する方法を学び身につけることが課題となる(梶田, 2002)。広義の意味でひきこもりともいえる不登校児童・生徒においては、自己・他者意識および欲求不満耐性との関連がみられることから、大学生のひきこもり傾向者においても同様の関連があることが推察される。本研究では、「大学へ通学することが可能であり、ひきこもりたい気持ちをもちつつも、表面上、適応しているかのように見える状態」をひきこもり心性と定義し、大学生のひきこもり心性を調べる尺度開発を行う。そして大学生のひきこもり心性と自己・他者意識の関連を明らかにし、さらに欲求不満耐性との関連も検討した。

研究1：大学生のひきこもり心性に関する尺度開発

【目的】通学している大学生における、ひきこもりたい気持ちが喚起される状況と、彼らがひきこもりたい気持ちになった時に生じる思考と行動を測定する尺度を作成し、その信頼性と妥当性を検討した。

【方法】(1) 予備調査：分析対象者は、大学生および大学院生 55 名。調査内容は、ひきこもりたい気持ちの時の周辺(状況)、考え方、前向きな考え方、行動について自由記述形式。KJ 法を行った結果、ひきこもりたい気持ちが喚起される状況に関する 19 項目、思考に関する 28 項目、行動に関する 25 項目が得られた。(2) 本調査：分析対象者は、大学生および大学院生 422 名。調査内容は、①予備調査で得られた各尺度(5 件法)、②大学生活不安尺度(藤井, 1998)のうち 9 項目、③ひきこもり経験の有無。

【結果と考察】ひきこもりたい気持ちを喚起される状況は

「対人関係上の困難」「精神的不調」、行動は「外界からの孤立」「外界との接触」、思考は、否定的な思考のみならず、肯定的な思考も存在することが示唆され、信頼性と妥当性を備えた尺度が作成された(Table 1)。

Table1 各尺度の命名とα係数

	下位因子の命名	α係数
ひきこもりたい気持ち喚起状況尺度 [2因子, 全13項目, α=.904]	第1因子 対人関係上の困難 (7項目)	.804
	第2因子 精神的不調 (6項目)	.858
ひきこもりたい気持ちの時の思考尺度 [4因子, 全20項目, α=.760]	第1因子 ひきこもりたい気持ちの整理 (7項目)	.833
	第2因子 ひきこもりたい気持ちからの脱出 (7項目)	.774
	第3因子 ひきこもりたい気持ちに基づく自己評価 (3項目)	.821
	第4因子 ひきこもりたい気持ちの受容 (3項目)	.816
ひきこもりたい気持ちの時の行動尺度 [2因子, 全14項目, α=.743]	第1因子 外界からの孤立 (8項目)	.809
	第2因子 外界との接触 (6項目)	.761

研究2：ひきこもり心性と自己・他者意識との関連

【目的】ひきこもり心性と自己・他者意識との関連を検討した。

【方法】(1) 分析対象者は、大学生および大学院生 188 名。(2) 調査内容は、①大学生のひきこもり心性に関する3つの尺度(本研究1にて作成)②自己意識尺度(菅原, 1984)③他者意識尺度(辻, 1993), ④ひきこもり傾向尺度(坂東, 2002)⑤ひきこもり経験の有無、ひきこもりたい気持ちが生じる頻度や程度に関する質問項目⑥P-F スタディ(Rosenzweig, 1978)を実施(研究3にて分析)。(3) ⑥の協力者、参加の賛同が得られた者。

【結果と考察】ひきこもり心性の得点が高い人は、自己・他者意識が一般的に高いことが示唆された。また、ひきこもり心性の得点が高い人と低い人とでは、自己・他者意識がひきこもりたい気持ちの時の思考内容や行動様式に異なった形で影響をおよぼしていた。

研究3：ひきこもり心性と欲求不満耐性との関連

【目的】上記の心性と欲求不満耐性との関連を検討した。

【方法】(1) 分析対象者は、大学生および大学院生 26 名。(2) 調査内容は、研究2を参照。

【結果と考察】女子大学生は、ひきこもり心性の得点の高さと欲求不満耐性の低下が必ずしも一致せず、一方、男子大学生においては、ひきこもり心性の得点が高い場合、自我防衛力の弱さや自己主張性の乏しさゆえ、欲求不満に対する耐性が低下の可能性があることが示唆された。

【総合考察】本研究の知見は、ひきこもり心性の高い得点の人の特徴を理解することにより、大学生のひきこもりが顕在化する前の段階で何らかの対応に役立つことを示していた。